

山上憶良「子等を思ふ歌」について

廣川晶輝

一 はじめに

本稿は、題詞に「思子等歌」とあり、「題詞・序文・長歌・反歌」という形を採る、『万葉集』巻五に載る山上憶良の左の作品を考察の対象とする。⁽¹⁾

思子等歌一首并序

釋迦如来金口正説 等思衆生 如羅睺羅 又説 愛無過_レ子 至極大聖尚
有_レ愛_レ子之心 况乎世間蒼生誰不_レ愛_レ子乎

瓜食_レめば 子_レども思_レほゆ 栗食_レめば まして偲_レはゆ いづくより 来_レりしもの
ぞ まなかひに もとなかかりて 安眠_レし寝_レさぬ (5・八〇二)

反歌

銀_レも 金_レも玉_レも 何せむに まされる宝 子_レに及_レかめやも (5・八〇三)

この作品に対しては、従来、大きく分けてふたつの見解が対立している。井村哲夫氏は、「そのテーマとしては、従来、大きく分けてふたつの見解が対立している。井村哲夫氏は、「そのテーマとしては、盲目的に子どもに執着して止まぬ親の愛の愚かしさまでの苦悩を孕んだ姿、というような説明が宜しいのではなからうか。」と述べ、⁽²⁾芳賀紀雄氏は、「長歌は、……底を流れる主調は、喜びの情感に他ならず、それを正面切つて発揚するのが、反歌の占める位置だろう。」と述べて、⁽³⁾それぞれが主張する主題が当該作品全体を貫いていると把握する。本稿は、これらの把握に一定の留保を設けたい。つまり、長歌と反歌の目指す内容が異なる場合もあり得るのではないかと考えるのである。

本稿は、「題詞・序文・長歌・反歌」という形を採るこの作品の読解を目指した

い。

二 題詞について

その読解として、最初に題詞に注目しておかなければならない。題詞の訓みについてだが、乾善彦氏の、「『思』のあり方を総合する形で題詞の『思』は、『おもほゆ』と『しのはゆ』とに対応している」という指摘を参照すれば、⁽⁴⁾題詞の「思」の字は、かえって訓読すべきではないであろう。問題は、この「思」によってどのような内容が示されているかということである。

この「思」について詳しく指摘するのが、新日本古典文学大系版『万葉集』⁽⁵⁾である。その指摘を検討してみよう。そこでは、

中国の漢魏晋の時代に見える「思友詩」「思子詩」などの詩題は、いずれも離別している人、または故人を思うことを意味し、万葉集の題詞中の「思」も、八九七以外は同様。この「思子等歌」もまた、遠くにいる子どもたちを遥かに思い偲んだ歌の意であり、歌詞の「思ほゆ」「偲はゆ」に対応する。

と指摘されている。確かに、『芸文類聚』⁽⁶⁾(巻三十四、人部十八、哀傷、晋潘岳)には、「又_レ思_レ子詩曰 造化甄_レ品物_レ 天命代_レ虚盈_レ 奈何念_レ稚子_レ 懐奇隕_レ幼齡_レ 追想存_レ髣髴_レ 感道傷_レ中情_レ 一往何時還_レ 千載不_レ復生_レ」とある。しかし、死んだ我が幼子への思いを詠んだこの詩の「思」をもって、当該作品のあり方と同一に論じるには躊躇せざるを得ない。加えて、遠く離れた友を思う「思友詩」は「交友」の範疇であり性質を異にする。これも同一に論じるには躊躇せざるを得ない。⁽⁷⁾また、

確かに『万葉集』中の「思」の用例は、

但馬皇女在_三高市皇子宮_三時_三穗積皇子_三御作歌一首(2・一一四題詞)

在_三久迩京_三留_三寧樂宅_三坂上大嬢_三大伴宿祢家持作歌一首(4・七六五題詞)

などのように、その用例の大部分が、会うこと叶わない恋しい人を感じる例である。

しかし、新日本古典文学大系版『万葉集一』のように「八九七以外は」とし、山上

憶良の作品である巻五・八九七番歌題詞の用例「老身重病経_三年辛苦及_三思_三兒等_三

歌七首 長一首 短六首」を例外とする立論の是非はどうであろうか。この題詞に括

られた長歌八九七番歌には「五月蠅なす 騒く子ども」とあり、この長歌作品の中

の「子ども達」は、作中の叙述の主体の眼前に、と言えよう。この長歌作品の最

後の反歌九〇三番歌の後ろには「去神龜二年作之」とあり、当該作品は八〇五番歌

の左注にあるように「神龜五年」の作品である。新日本古典文学大系版『万葉集一』

には、この巻五・八九七番歌題詞の用例を例外とする理由は何も示されていない。

さて、右の諸点を考慮すれば、新日本古典文学大系版『万葉集一』が示す根拠に

基づいての、「この『思子等歌』もまた、遠くにいる子どもたちを遥かに思い偲ん

だ歌の意」という把握には、簡単に従えない次第となる。そして、さらに怖れる

のは、この把握を根拠として、例えば、「この時山上憶良は幼い子どもを都に残し

て、筑前国に赴任していたのだ」や、あるいは、「山上憶良は幼い子どもを国府に

残して、遠くの嘉摩郡に巡行していたのだ」という「実体論」がまことしやかに語

られてしまうことである。

巻五・八九七番歌題詞の用例のように、眼前の子ども達を思うのにも「思」は使

われている。そのことに自覚的であるべきだろう。その用例を例外として、当該作

品を「遠くにいる子どもたちを遥かに思い偲んだ歌」と把握するのでは、問題の真

のありか自体を捉え損ねることになりかねない。眼前の子ども達を思うのにも「思

」が使われ得ることを考え合わせれば、遠くに居るとか居ないとかという局面が問題

なのではないのであろう。むしろ、当該作品においては、そうしたことがらを超越

して「思」を考えておくべきことに、自覚的でなくてはならない。ここは、前掲の

乾善彦氏の、「『思』のあり方を総合する形」という指摘が貴重な提言ということ

本稿としては、当該作品の題詞において「子ども達をへ思」⁽⁹⁾という問題系が提

示されている、この点をまず確認しておくこととしたい。

三 序文について

(一)「釋迦如来金口正説 等思_三衆生_三如_三羅睺羅_三」について

次に、序文に移り、その冒頭部分「釋迦如来金口正説 等思_三衆生_三如_三羅睺羅_三」

について論じたい。この部分の出典について、『萬葉代匠記』(初稿本・精撰本)は、

「最勝王経曰。普觀_三衆生_三愛無_三偏党_三如_三羅睺羅_三。」と指摘し、日本古典文学大系版

『萬葉集二』⁽⁹⁾は、「合部金光明経(隋大興善寺沙門积宝貴合、北凉天竺三藏曇無讖訳)

の寿量品『等觀_三衆生_三、如_三羅睺羅_三』によつたと見る方がよい。」と指摘している。

井村哲夫氏は、この『萬葉代匠記』や日本古典文学大系版『萬葉集二』の指摘を、

「それは釈迦如来その人の言葉でなくて、一婆羅門の仏を礼したてまつて申した

との言葉の中にある」という点から退け、「大般涅槃経卷第一寿量品(北本、北凉天竺

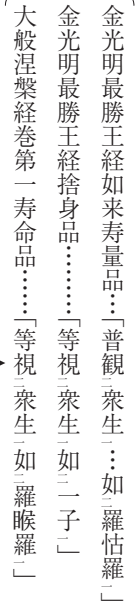
三藏曇無讖訳。南本にては序品に入る部分)に『等觀_三衆生_三如_三羅睺羅_三』とあるのを挙げたい。」

と述べて、釈迦如来自らの言葉の例である「大般涅槃経卷第一寿量品」の用例を指

摘する⁽¹⁰⁾。

出典については、井村氏の指摘のとおりであるが、左の図式で示す違いは重要で

あろう。



当該憶良作品 ……『等思_三衆生_三如_三羅睺羅_三』

つまり、当該作品では、題詞の「思子等」に合わせて、「観や視」という「見る」という局面ではない、子どものことを思う「思」の局面へと、問題自体を改変している、そうした点を指摘することができよう。

(二)「又説 愛無_レ過_レ子」をめぐって

次に、序文の「又説 愛無_レ過_レ子」の部分に移ろう。諸注が指摘するように、この部分の出典は確認できない。しかし、出典を指摘できないという段階で止まってしまうべきではなからう。あたかも「仏説」や「仏典」を実際に引用したかに見える、いわば作爲的な〈引用〉によって、結果、テキスト上で、釈迦は、「子どもへの愛」を論じる局面に立ち会わされることとなる。このことがらを重視すべきである。いわば「確信犯」としてこの〈引用〉は、そうした方便から出たものであろう。

井村哲夫氏はこのことについて鋭く指摘している。⁽¹¹⁾その記述を左に掲げよう。

彼は花を愛人のように思つて愛する

という文から、

彼は愛人を愛している

という判断が導かれぬように、(4)「等思衆生、如_レ羅睺羅」から、「釈迦如来が羅睺羅を愛された」という判断は導かれぬのである。

と述べ、本来は「釈迦如来が羅睺羅を愛された」とはならないのに、当該の序文では「釈迦如来が羅睺羅を愛された」となっている、と指摘する。さらに、

釈迦如来が口づから「我が子羅睺羅が一番可愛い」と仰言つたら困るのである。然るにそれを(4)「至極大聖、尚有_二愛_一子之心。」という判断の論拠として提出している以上、憶良は(4)をば釈尊その人の愛子の念の述懐であるかのように受け取つて引用していると言う事になる。即ち、解釈の仕替えがあるのである。⁽¹²⁾

と指摘する。また、芳賀紀雄氏は、「法愛」の比喻と「欲愛」とのすりかえがなされる⁽¹³⁾というきわめて重要な指摘を行なっている。⁽¹⁴⁾

このように、当該作品の序文の「愛」は、決して、一筋縄ではいかないものと思われる。

井村氏指摘の傍線部「解釈の仕替え」にならつて言えば、いわば「愛の仕替え」を、また、芳賀氏指摘の傍線部「すりかえ」にならつて言えば、いわば「愛のすりかえ」を、山上憶良は他の作品で行なっている。⁽¹⁵⁾ここでは、この「愛」をめぐつての複雑な様相を把握することに努めておきたい。参照すべきは、『万葉集』巻五の

「日本挽歌」前置の漢詩の用例である。

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無_レ結 從來厭_レ離此穢土 本願託_二生彼淨刹_一
この「愛河」について、小島憲之氏は、「愛河」は愛欲を河にたとへたもの」と指摘し、⁽¹⁶⁾芳賀紀雄氏は、

ここで注意せねばならないのは、起句の「愛河」の「愛」が、

一切煩惱、愛為_二根本_一（大集経卷三十一・日密分中護法品一、大正蔵十三卷二三頁下）などとされる愛とは、本質的に違うことである。それは、本来の義とはすりかわつた、妻との愛として提示されているのみである。

と指摘し、⁽¹⁷⁾鉄野昌弘氏は、

子等への「愛」が苦悩でもあつたと同様、妻への「愛」もまた「波浪」であり、「煩惱」であつたはずである。初二句はともに、そうした妻への様々な「愛」の感情が、その死によって消滅してしまつたことを言うのではないか。

と指摘する。⁽¹⁸⁾ここには、「愛」をめぐつての複雑な様相があると言えよう。

また、次の例も合わせて参照されよう。

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世間は かくぞ理 もち鳥のかからはしもよ……(5・八〇〇 山上憶良「令反或情歌」)

この用例について、井村哲夫氏は、「父母・妻子の存在、又その関係、これが色であり、それを見れば『たふとし』『めぐし愛し』と執着する、これが触である。我々を纏縛して、繭膠の如く離さない恩愛の絆なのである。」と指摘する。⁽¹⁹⁾また、芳賀紀雄氏は、「仏教では、愛を悟りに到達するのを妨げる情意的な煩惱として退けるが、憶良には、かえつてそれを支えとして生きようとする姿勢が窺える」と指摘し、さらに、「(こ)は拳例の(こ)とき表現を逆用したと見るべきではなからうか」と指摘する。⁽²⁰⁾この芳賀氏の指摘は、山上憶良と仏典の「愛」をめぐる一筋縄ではいかない様相を明らかにし得た貴重な先行研究である。廣川晶輝も右の芳賀氏の指摘に示唆を受けて、「父母や妻子への『愛』が避けられないものであることの提示において、この世の中とはそういうものだ」という仏典の現実認識をうまく利用した⁽²¹⁾ことを指摘しておいた。

本稿としても、この「愛」を、重要な論点と考え、これから、論じて行く次第で

ある。

当該作品には、子どもへの「愛」が三箇所ある。

又説 **「愛無_レ過_レ子_一」**

至極大聖尚有**「愛_レ子_一之心_一」**

況乎世間蒼生誰不**「愛_レ子_一乎_一」**

この「愛」の中身とは一体何なのであろうか。

この点を考えるとき、このテキスト自体が、「釋迦如来金口正説」「又説」という

ように、テキストの外部へと向かって開いていることから目を逸らしてはならない

であろう。テキストの外部へ向かって開かれている作品自体のありように従って、

「仏説」および「仏典」への目配りをしておくことが大切である。

(三) 「子どもへの愛」について

(一) 「仏説」および「仏典」において

① 「子を愛すということ」が「煩惱」の義となる例

芳賀紀雄氏が指摘するように、「大方等大集経」(卷三十二)には、「一切煩惱愛為

根本。」とある。この芳賀氏の指摘に導きを受けて、「子どもへの愛」について見て

行こう。

「愛」一般のみならず、「子どもへの愛」についても、「煩惱」として扱われている

例を見出すことができる。仏書・仏典のそうした用例を見てみよう。なお、用例

の確認の便宜を図るため、『国訳大蔵経』の書き下し文を併記しておくこととする。

『佛本行集経』(卷第三十五 耶輸陀因縁品下)には、

爾時世尊。河邊遙見其耶輸陀善男子父向佛而來。世尊見已。作如是念。此耶輸

陀善男子父。既來求子。以**「愛_レ念_一」**故。或能倉卒不避好惡。抱耶輸陀善男子身。

……

爾の時、世尊、河邊に遙に其の耶輸陀善男子の父の、佛に向ひて來るを見給ひ、見

已りて是の如き念をなし給ふ。此の耶輸陀善男子の父、既に來りて子を求む。**「愛念_一」**

を以ての故に、或は能く倉卒に好惡を避けず、耶輸陀善男子の身を抱かん。……

と。(『国訳大蔵経 経部 第十四卷』)

とある。ここでは、耶輸陀善男子の父親が抱いている耶輸陀善男子への取り乱した
「煩惱」の思いが、二重傍線部のように、世尊釈迦自身によって、四角囲みの「愛
念」というように表わされている。同じく『佛本行集経』(卷第二十 車匿等選品下)に
は、子である釈迦が出家したことを知った、父淨飯王の行動が左のように綴られて
いる。

時淨飯王。説是語已。因**「愛_レ子_一」**故。苦切所逼。臥在於地。作如是等。受苦惱事。

舉聲大哭。乍撲乍起。言音哽咽。

……時に淨飯王、是の語を説き已り、**「愛子に因るが故に、苦切に逼られ、臥して地**

に在り。是の如き等の苦惱を受くる事を作し、聲を擧げて大哭し、乍ち撲ち乍ち起

ち、言音哽咽す。(『国訳大蔵経 経部 第十三卷』)

このように、ここでは、「子を愛す」ことによる煩惱が具体的に語られている。同

じく『佛本行集経』(卷第五十三 優陀夷因縁品下)でも、世尊による大衆への説法にも

かわらぬ、

輪頭檀王。爲於**「愛_レ子_一」**煩惱羅網之所覆故。遂不獲果。坐世尊前。以哀愍音悲泣

哽咽。……

輪頭檀王のみ、子を愛する煩惱羅網に覆はるるが爲の故に、遂に果を獲ず。世尊の前

に坐して、哀愍の音を以て、悲泣哽咽して、……(『国訳大蔵経 経部 第十四卷』)

とあり、子を愛する煩惱が述べられている。

このように、「仏説」および「範疇を拈けて「仏典」においては、予想通り、「子

どもを愛す」ことを「煩惱」として退ける記述を目にすることができる。しかし、

仏説および仏典には、そうした義の例ばかりなのかというと、決してそうではない。

仏説および仏典において、「子どもへの愛」は複雑な様相を呈していると云える。

項を改めて論じたい。

② 「子を愛すということ」が「子をいとおしく思う」義となる例

引き続きて仏書・仏典の用例を見てみよう。なお、ここでも、用例の確認の便宜

を図るため、『国訳一切経』の書き下し文を併記しておくこととする。

唐の永淳二年(六八三)に中印度の沙門地婆訶羅が訳出した『方廣大莊嚴経』

(卷第八 詣菩提場品第十九) には、

爾時世尊欲重宣此義。而説偈言

……煩惱所擾者 便得大安樂 狂亂得正念 貧賤得富貴 病苦得痊除 禁
囚得解脫 一切無忿競 展轉起慈心 如父母愛子 菩薩光明網 遍滿於

十方 普照恒沙界 映蔽無邊土

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『……煩惱に擾さるる者は、便、大安樂を得たり。狂亂は正念を得、貧賤は

富貴を得、病苦は痊除を得、禁囚は解脫を得。一切忿競無く、展轉して慈心を起

す、父母の[子]を愛するが如し。菩薩の光明の網は、十方に遍滿して、普く恒沙の界

を照し、無邊の土を映蔽す。……(国訳一切経印度撰述部 本縁部 九)⁽³⁰⁾

とある。二重傍線部のように、これは、世尊釈迦自らの口から語られた言葉である
ことが判る。世尊の教えのおかげにより民衆は慈しみの心を起すのだが、その心
の喩えとして、「父母が子どもをいとおしく思い愛する心」を世尊自らが挙げてい
るのであり、世尊自らが父母が子どもをいとおしく思い愛する心を讃えていること
となる。ここには、「煩惱」として退けるのではない要素があるわけである。

また、釈迦の法愛・慈愛を讃える文脈における「子どもへの愛」の例を多く指摘
できる。中村元氏は、「於諸衆生愛之若子。」(『維摩經』問疾品)という記述を参照
し、「子に対する愛 (sneha) が尊ばれているとともに、一切衆生に対して子に対す
るような愛情を以て対せよ、というのである。」と述べており、藤田宏達氏は、

親の子に対する愛は、仏の衆生に対する愛、すなわち慈悲のこころを表わす譬
えとして用いられる。サンスクリット文「法華經」……によると、仏は「父が
愛するひとり息子に對するよう、(pitrva priya ekaputrake) あわれみ (karuṇā)
を生じて、三界に現われ、輪廻の輪の中に輪転している生ける者たちを見る」
という。

と述べている。⁽³²⁾ 世尊釈迦の法愛・慈愛を讃える文脈における「子どもへの愛」の例
について見てみよう。『僧伽羅利所集經』(上巻)には、

爾時世尊獨遊無侶亦無有師。功德無量欲訓誨衆生。於佛法衆皆悉成一智成就成
等正覺。最尊微妙無等者。……除去有無有愛。亦無有伴侶。一切功德智成就。

等擁護一切衆生如父母愛子。展轉功德力成就。無貪憍慢故曰最勝。……

爾の時、世尊獨遊して、侶無く、亦師有る無し。功德無量にして、衆生を訓誨せん
と欲す。佛法衆に於て皆悉く成じ、一切智成就し、等正覺を成ず。最尊微妙にして、
等しき者無し。……有を除去して、愛有ること無く、亦伴侶有ること無し。一切の
功德智成就し、等しく一切衆生を擁護すること、父母の[子]を愛するが如し。展轉し
て功德力成就し、貪・憍慢無きが故に、最勝と曰ふ。……(国訳一切経印度撰述
部 本縁部 九)⁽³⁴⁾

とある。ここでは、世尊の法愛が述べられる文脈において、傍線部のように子を慈
しみいとおしく思う義が述べられている(なお、波傍線部の「愛」は煩惱の義である)。

また、左の『増一阿含經』(卷第三十二 力品第三十八之餘)を見てみよう。鬼神の害
により死者多数の毘舍離城の人民は、鬼神を追い払うために世尊に來訪を請願する
ことを協議する。左の例は、その折りのある人物の發言の部分の例である。

或復有作是説。如來有大慈悲愍念衆生遍觀一切。未度者使令得度。不捨一切衆
生如母愛子。設當有人請者如來便來。……
或は復是の説を作す有り、「如來は大慈悲有りて、衆生を愍念したまひ、遍く一切
を觀じて未だ度せざる者をして、度することを得使令め、一切衆生を捨てざることを
母の[子]を愛するが如し。設し當に人有りて請じまつれば、如來は便ち來りたまはん。

……)と。(国訳一切経印度撰述部 阿含部 九)⁽³⁶⁾
さらに、同じく『増一阿含經』(卷第四十七 放牛品第四十九之餘)には、

目連報曰。提婆達兜勿懷恐怖。地獄極苦無過斯處。彼釋迦文佛如來至眞等正覺。
愍念一切蝸飛蠢動。如母愛子心無差別。以時演義終不失叙。亦不違類所演過
量。……
目連報へて曰く、「提婆達兜、恐怖を懷くこと勿れ。地獄の極苦斯の處に過ぐるは無
し。彼の釋迦文佛・如來・至眞・等正覺は、一切の蝸飛蠢動をも、愍念したまふこ
と、母の[子]を愛するが如く、心に差別無し。時を以て義を演べんに、終に叙を失は
ず、亦類に違せず、演ぶる所過量なり。……)と。(国訳一切経印度撰述部 阿含
部 十)⁽³⁷⁾

ともある。

ところで、松下貞三氏は、「漢訳仏典は翻訳文という中国文の一種で、従来使ってきた伝統語を用いないと、愛情のことを書き表わせない」という重要な点を指摘している。³⁸⁾つまり、「サンスクリット語仏典」には、子どもへの思いを①煩惱として退ける例、②讀える例、この双方が存在する。「漢訳文典」では、この右の①②とも「愛」という漢字によって表出したわけである。右の松下貞三氏の指摘は、こうした内容を我々に改めて知らしめるものである。山上憶良も「漢訳仏典」に触れていたのだから、「サンスクリット語仏典」ではなく、「漢訳仏典」の位相において、「愛」を確認するので問題なからう。

ここまでの考察をまとめよう。すなわち、山上憶良をとりまく仏書および仏典における「子どもへの愛」は、確認して来たように、煩惱として退ける例ばかりでなく、世尊釈迦自身が、「父母が子どもをいとおしく思う心」を慈しみの心として讀えている例もあるのであり、とても複雑な様相を呈しているのである。

(2) 「日本の散文」において

当該作品では、見て来たように、「釋迦如来金口正説……」「又説……」と、仏説が、日本の散文としての序文にへ引用されてきている。であるので、今度は、「日本の散文」において、「子どもへの愛」がどのような様相であるかを確認しなければならぬであろう。

以下、日本の上代における「子どもへの愛」をつづった散文の例を、『日本書紀』³⁹⁾『古事記』⁴⁰⁾『日本書紀』⁴¹⁾『統日本紀』⁴²⁾の例を順に、すべて挙げておく。

『日本書紀』(景行天皇四十年是歲条)

(日本武尊崩の報せを(廣川補注) 天皇聞しめして、寢席安からず、食味甘からず。昼夜に喉咽ひて、泣悲しび標擗ちたまふ。因りて大きに歎きて曰はく、我が子小碓王、昔熊襲の叛きし日に、未だ総角にも及らぬに、久しく征伐に煩み、既にして恒に左右に在りて、朕が不及を補ひき。然るに東夷騒動み、討たしむる者勿し。愛(かなしき) (日本古典文学大系版『日本書紀』、愛(めぐみ)を忍びて賊の境に入らしむ。一日の願はずといふこと無し。……)とのたまふ。

『日本書紀』(景行天皇五十三年秋八月条)

丁卯の朔に、天皇、群卿に詔して曰はく、「朕、愛子(かなしき) (大系、愛子(めぐみ)しこ)を、顧ふこと何の日に止まむ。翼はくは、小碓王の平けし国を巡狩、まく欲し」とのたまふ。

『日本書紀』(応神天皇四十年春正月条)

辛丑の朔にして戊申に、天皇、大山守命・大鷦鷯尊を召して、問ひて曰はく、「汝等、愛し子(こをうつくしぶ) (大系、愛し子(こをうつくしき)や)とのたまふ。対へて言したまはく、「甚だ愛(うつくし) (大系、愛(うつくし)とまをしたまふ。

『日本書紀』(仁德天皇即位前紀)

誉田天皇崩ります。時に太子菟道稚郎子、位を大鷦鷯尊に譲りまして、未だ即位さず。仍りて大鷦鷯尊に諮したまはく、「……其れ、先帝の我を立てて太子としたまひしは、豈能才有りとすならむや。唯愛(めぐし) (大系、愛(めぐみ)し)としたまひつればなり……」とまをしたまふ。

『日本書紀』(継体天皇八年春正月条)

妃の曰さく、「余事に非ず。唯妾が悲しぶる所は、飛天之鳥も、愛(養兒) (こをうつくしむ) (大系、愛(養兒) (おのがこをうつくしぶ)が)が為に、樹巔に巢作ふは、其の愛(うつくし) (大系、愛(うつくし)の)の深きなり。伏地之虫も、子を護衛らむが為に、土中に窟作るは、其の護の厚きなり。乃ち人に至りては、豈慮(あにおひかり) 無きこと得むや。嗣無き恨、方しに太子に鍾れり。妾が名も随ひて絶えなむ」とまをす。

『日本書紀』(欽明天皇即位前紀条)

天国排開広庭天皇は、男大迹天皇の嫡子なり。母は手白香皇后と曰す。天皇、愛(うつくし) (大系、愛(うつくし)にて、常に左右に置きたまふ。

『日本書紀』(欽明天皇六年冬十一月条)

膳臣巴提便、百濟より還りて言さく、「……敬みて糸綸を受け、陸海に劬勞み、風に櫛り雨に沐して、草を藉にし荊を班にすることは、愛(其子) (そのこをめで) (大系、愛(其子) (そのこをめで)にて、父の業を紹がしめ

むが為なり。惟るに、汝威き神も、愛_レ子(こ)をめぐむ(大系、愛_レ子(こ)をめぐむ)ことは一なり。今夜、児亡せたり。蹤を追ひて覓ぎ至る。命亡せむことを畏りずして、報いむが故に来つ」といふ。……とまをす。

『日本書紀』(推古天皇元年夏四月条)

庚午の朔にして己卯に、厩戸豊聡耳皇子を立てて皇太子としたまふ。……

橘 豊日天皇(用明天皇。廣川注)の第二子なり。……父の天皇、愛(めぐみ)

(大系、愛(めぐみ)て、宮の南の上殿に居らしめたまふ。

『日本書紀』(推古天皇二十九年春二月条)

己丑の朔にして癸巳に、半夜に厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。是の時に、諸王・諸臣と天下の百姓、悉に長老は愛兒(めぐき) (大系、愛兒(めぐき)を失へるが如くして、塩酢の味、口に在れども嘗めず。

『日本書紀』(舒明天皇元年春正月条)

癸卯の朔にして丙午に、……群臣、伏して固く請して日さく、「大王は、先朝鍾愛(しようあい) (大系、鍾愛(めぐしとおもほし)したまひ、幽顕心を属けたり。皇綜を纂きたまひ、億兆に光臨したまふべし」とまをす。

『古事記』(上巻 大國主神条)

其の大神、呉公を咋ひ破り唾き出すと以為ひて、心に愛(うつくし)と思ひて、寝ねき。

『古事記』(中巻 応神天皇条)

是に、天皇、大山守命と大雀命とを問ひて詔ひしく、「汝等は、兄の子と弟の子と孰れか愛(うつくし)ぶる」とのりたまひき……爾くして、

大山守命の白ししく、「兄の子を愛(うつくし)ぶ」とまをしき。次に、大雀命、天皇の問ひ賜へる大御情を知りて、白ししく、「兄の子は、既に人と成りぬれば、是悒(おほつか)きこと無し。弟の子は、未だ人と成らねば、是愛(うつくし)とまをしき。」

『日本書紀』(上巻「人畜二履まるる鬮體救ひ取められ、靈しき表を示して現に報ずる縁

母、長子を罵りて曰はく「呼矣我が愛子(まなこ) (新潮日本古典集成版「日本書紀」(44) 愛子(まなこ)、汝の為に殺さる。他の賊に非ざるなり」といふ。

『日本書紀』(上巻「法花経を憶持し、現報を得て奇しき表を示す縁 第十八)

(日下部猴が、死んだ我が子の生まれ変わりの青年を目の前にして(廣川補注) 猴、愛之(めで) (集成、愛(め)で)て喚び入れ、床に居て瞻りて言はく「若し死にし昔の我が子の靈か」といふ。

『日本書紀』(中巻「女人、大蛇に婚はれ、薬の力に頼りて、命を全くすることを得る縁 第四

十一)

……昔人の兒有り。其の身甚だ軽く、疾く走ること、飛ぶ鳥の如し。父常に重みし愛(うつくし)び(集成、愛(うつくし)しみ)、守り育つること、眼の如し。父、子の軽きを見て、譬へて言はく、「善きかな、我が兒、疾く走ること、狐の如し」といふ。其の子命終はりて、後に狐の身に生まる。善き譬を願ふ応し。悪しき譬を欲は不れ。必ず彼の報を得むが故なり。

『日本書紀』(下巻「鬮體の目の穴の筭を掲キ脱チテ、折ひて靈しき表を示す縁 第二十

七)

父母聞きて「嗟呼、我が愛子(まなこ) (集成、愛子(まなこ)、汝が為に殺さる。他の賊に非ず」といふ。

『続日本紀』(文武天皇大宝三年閏四月条)

辛酉の朔、……新羅の客を難波館に饗す。詔して曰はく、「新羅国使薩食金福護が表に云はく、「寡君不幸にして、去にし秋より疾みて、今春を以て薨して、永く聖朝を辞る」といへり。朕思ふに、其れ蕃の君は異域に居りと雖も、覆育に至りては、允に愛子(あいし)に同じ。……」とのたまふ。

まず、『日本書紀』の「子どもへの愛」の用例について。これらは、文脈に即して、「うつくし」 「かなし」 「めぐし」 「めぐむ」 「めづ」というように、さまざまに訓読されている。諸注釈書が、いかに訓を付けるべきかに心を砕いていることを考えれば、すべての用例を詳しく分析したいところではあるが、紙数の関係により、今は、これらのすべての用例に煩惱の意味は無いということを確認するに留め、これらの用例の根底に子どもをいとおしく思う意味を見出しておくに留めてお

きたい。

次に、『古事記』の「子どもへの愛」の用例について。中巻、応神天皇条の用例も、『日本書紀』の用例と同様に、子どものことをいとおしく思う例と言える。上巻、大國主神の条の用例については一言説明が必要である。須佐之男大神は、大穴牟遲神が自分のために呉公を咋ひ破つて吐き出しているのを勘違いするのだが、その時の心情として、「心に愛(うつくし)と思ひて」とある。須佐之男大神と大穴牟遲神とを、「義父と娘婿」として擬似的な父と子と認めれば、これも扱ってよい用例となり得よう。この用例は、父が子をいとおしいと思っている例となる。

さらに、『日本書紀』の「子どもへの愛」の用例について。これらも、子どものことをいとおしく思う例である。ただ、中巻第四十一話の用例について、松下貞三氏は、「この話は父の子を愛する態度が執着的であること、疾く走る様を狐にたとえたので、この子が狐に生まれかわったという悪報を得ることになったのであるから仏教的意味の『愛』とみるべき」と指摘している⁴⁵⁾。この「愛」については、判断の分かれるところであろう。

最後に、『続日本紀』の「子どもへの愛」の用例について。これも子どものことをいとおしいと思う例と言える。

以上、日本の散文における、「子どもへの愛」を把握して来た。これらには、判断が分かれる一例(『日本書紀』中巻第四十一話)を除き、すべて「煩惱」の要素を見出すことができない。これらには、「愛」に付訓し得る「うつくし」「うつくしぶ」「かなし」「めぐし」「めぐむ」「めぐむ」などをふまえての、「いとおしく思う」義があると判断される。『家隸万象名義』⁴⁶⁾(第二帖、八四オ)には、「愛」に、「隠、□、傷、親、憐念、優、仁、」とあるが、その字義のうちのいくつかと重なると言えよう。

ここまでの「子どもへの愛」の考察をまとめよう。「仏説」および「仏典」における「子どもへの愛」は、「煩惱」の義の例があるが、「いとおしく思う」義の例もある。双方が有るわけである。また、日本の散文における「子どもへの愛」は、判断が分かれる一例(『日本書紀』中巻第四十一話)を除き、すべて、「愛」に付訓し得る「うつくし」「うつくしぶ」「かなし」「めぐし」「めぐむ」「めぐむ」などをふまえての、「いとおしく思う」義である。

(四) 当該作品の「子どもへの愛」について

当該作品には、

又説 愛無_レ過_レ子

至極大聖尚有_レ愛_レ子之心

況乎世間蒼生誰不_レ愛_レ子乎

という、「子どもへの愛」を述べる三つの部分があるわけであるが、これらの「子どもへの愛」の内実はどうなのであるか。

「仏説」「仏典」における「子どもへの愛」は複雑な様相を示しており、子どもを「いとおしく思う」意味の例もあること、これまで確認したとおりである。これら三つの部分を、単純に「煩惱」の意味として片付けてしまうことはできないはずである。また、これら三つの部分を、日本の散文における子どもへの「愛」の多くの例に鑑みて、すべて「子どもをいとおしく思う」意味に解釈してしまうこともまたできないはずである。テキスト自体がテキスト外部の「仏説」「仏典」に向かって開いているのであるから、「煩惱」の意味を無視することは、決してできない。

詰まるところ、この三つの部分は、次のように捉えておくのが、テキストのありように最も即したものとなるであろう。つまり、

又、釈迦如来は、次のように説いた。

X 愛執の「煩惱」は、子どもに対して抱く「煩惱」以上のものはない。

Y 「いとおしく思う」気持は、子どもに対して「いとおしく思う」気持以上のものはない。

至極大聖である釈迦でさえやはり、

X 子どもに対する愛執の「煩惱」

Y 子どもを「いとおしく思う」気持

を持つている。ましてや、「世間蒼生」のうち一誰が、

X 子どもへの愛執の「煩惱」から自由になろうか。皆、束縛される。

Y 子どもを「いとおしく」思わないだろうか。皆、「いとおしく」思う。

という把握である。

当該作品の「子どもへの愛」を、X・Yのふたつの義のどちらか一方に決めるこ

とは、そもそも、不可能である。つまり、「又説 愛無_レ過_レ子」の〈引用〉によって、X・Yの両義の混然が作品上にもたらされているのであり、両義の混然の相において捉えておくべきであろう。

早くに、森本治吉氏は、

又別の時に、人間のものに対する愛・執着といふものは、子供に対する愛以上に強く大いなるものはない、と説かれた。……「子供愛概論」ともいふべきものである。

と述べていた。⁴⁷⁾ 森本氏のこの直感的な指摘のとおり、子どもへの愛は単純ではない。当該作品では、序文にある「世間蒼生」の「子どもへの愛」の〈実相〉が述べられていると言えよう。つまり、子どもをこの上なく可愛いと思う。いとおいしいと思う。しかし、苦悩の根源となることもある。そのような時、縁を切り切りたいと思っても、切ることはできない。親は親でなくなることができない。詰まるところ、そうしたことをすべて引き受けたうえで、子どもが存在してくれることをありがたいと思う。このような〈実相〉である。

さて、ここまで、序文の理解を深めて来た。その序文を受けて歌われるのが、まず、長歌になる。

四 長歌について

(一) 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ いくより 来りしものぞ まなかひに もとなかりて

長歌については、右の掲出部分がどのような表現の仕組みになっているのかを、まず、考えておきたい。もちろん、従来問題となつて、「いくより 来りしものぞ」を因縁・宿縁説で理解するのか面影説で理解するのかという問題⁴⁸⁾ともかわるわけであるが、本稿で理解を深めておきたいのは、その表現のシステム・仕組みについてである。

参照すべきは、内田賢徳氏の二本の論考にわたる見解⁴⁹⁾である。内田賢徳氏は、「見る」ことによつて偲ふことが触発される⁵⁰⁾表現のあり方を確認したうえで、

我が背子が やどなる萩の 花咲かむ 秋の夕は 我を偲はせ (20・四四四四) 山吹の 花取り持ちて つれもなく 離れにし妹を 偲ひつるかも (19・四一八四)

などのような、「見る」が「表現上顕在でない」用例の存在を指摘し、「見る」という表現が無くても「見る」ことと深く関わつてある「偲ふ」のありようを示唆する。そして、当該作品の表現について、

……換喩的な関係が感覚を通して捉えられる時、例えば「栗食めば」というそれは決して一般的でない。そこに偲はれるのは像としての子供であり、即ち見られるべきものである。偲ふとは可能な見ることであり、像は内部へと現れる。⁵¹⁾

と指摘し、傍線部のように、子どもの「像」が内部へと現れそれを「見る」のだと指摘する。この点、この内田論文を引用する、伊藤益氏の左の指摘⁵²⁾、

「思ほゆ」とは、見えざるもの・実際の視力の範囲外に定位するものが、内的意識のうちに措定されることにほかならなかつたと考えられる。眼前に欠如する事・物を「所見」の状態へともたらず「見る」ことの機能は、「思ほゆ」によつて、より内化(内面化)された形で回復される。

も合わせて参照されるべきであろう。また、内田賢徳氏は、

一二五三〔万葉集〕巻3・二五三番歌「稲日野も 行き過ぎかてに 思へれば 心恋しき 加古の鳥見ゆ」のこと。廣川注)・二五五〔万葉集〕巻3・二五五番歌「天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和鳥見ゆ」のこと。廣川注)の「……思へば……見ゆ」に代

表されるものとこの「……見れば……思ほゆ」は、二つながらに、かつての「……見れば……見ゆ」に対応しているのである。かつてのそれは、思うこと⁵³⁾が見ることを導くことと、現実の情景を見ることが心中に不所見の風景を思わしめることとの対照へと置き替えられる。

とも指摘している。内田氏の論に示唆を得て、長歌のこの部分の表現の仕組みの理解を図示すれば、次のようになろう。

〔内田氏の論に示唆を得ての長歌の理解〕

「瓜食めば 子ども思はゆ」「栗食めば まして俵はゆ」

現実の情景を見るのが心中に不所見の風景を思わしめる

思ふことが見ることと導く

「いづくより 来りし」「まなかひに もとなかかりて」

「瓜食めば 子ども思はゆ」「栗食めば まして俵はゆ」とは、内田氏の言う「現実の情景を見るのが心中に不所見の風景を思わしめる」と合致する。そして、「思ふことが見ることと導く」のであり、結果、「いづくより 来りし」「まなかひに もとなかかりて」という次第になる。というわけである。先の内田氏の論が指摘していた、子どもの「像」が現れる当該長歌の表現のシステム・仕組みを、このように把握することが出来る。

(二) 生理的な寢食を妨げる子どもの像

(一) 「寢食」の「食」

当該作品では、生理的な寢食を妨げるものとして、「子どもの像」が現れることが述べられる。まずは、「寢食」の「食」について見てみよう。「瓜食めば」「栗食めば」というように、「食む」が用いられるわけであるが、この「はむ」を理解したい。『万葉集』中の「はむ」の例のいくつかを見てみよう。

麻統王流_レ於伊勢国伊良虞嶋_二之時、人哀傷作歌

打麻を 麻統王 海人なれや 伊良虞の島の 玉藻刈ります (1・二三)

麻統王聞_レ之感傷和歌

うつせみの 命を惜しみ 波に濡れ 伊良虞の島の 玉藻刈り食(はむ) (1・

二四) (左注略)

馬柵越しに 麦昨(はむ) 駒の 罵らゆれど なほし恋しく 思ひかねつも

(12・三〇九六)

恋_レ夫君_二歌一首

飯喫(はめ)ど うまくもあらず 行き行けど 安くもあらず あかねさす
君が心し 忘れかねつも (16・三八五七)

右歌一首、伝云、佐為王有_二近習婢_一也。于_レ時宿直不_レ違、夫君難_レ遇。感情馳結、係恋実深。於_レ是当宿之夜、夢裏相見、覚寤探抱、曾無_レ触_レ手。尔乃哽咽歎歎、高声吟_二詠此歌_一。因王聞_レ之哀慟、永免_二侍宿_一

也。

麻統王の二四番歌の例は命を繋ぐために食べる意であり、きわめて生理的な「はむ」である。また、三〇九六番歌の例も序詞の中の例ではあるが、馬の食欲なのであり、生理的な例と言えよう。また、三八五七番歌の例も左注にあるように、夫に逢えない女性が逢えない辛さから、御飯を食べてもうまくもないことが述べられているわけであり、この「はむ」も、生きるために食べる生理的な行為としての「はむ」であると言える。

このように、「はむ」とは、生理的な行為を表わす言葉である。当該作品ではその生理的な「食べる」という行為の時にも、子ども達の間で思ひ起_二こされ_一、「子ども達の像・姿」が立ち現われる、と、表現されているのである。

「子ども達の像・姿」が立ち現れた叙述の主体は嬉しくないであろうか。嬉しはずではないか。しかし、当該作品では、「もとなかかりて」と表現されている。この「もとな」については、山田孝雄氏の、

この「もと」は漢字にていはば、根元又は根柢の義にあたるものなりと思ふ。而して、その「もと」は「理由なく」「根柢なく」などの精神によりて「わけもなく」「よしなく」「みだりに」などその場合によりて適する語をあてて解すべきものなりと思ふ。

という指摘が参照される。この指摘に導かれていくつかの「もとな」の例を見てみよう。

海神の 神の命の み櫛笥に 貯ひ置きて 斎くとふ 玉にまさりて 思へり
し 吾が子にはあれど うつせみの 世の理と ますらをの 引きのまにま
に しなざがる 越路をさして 延ふつたの 別れにしより 沖つ波 撓む眉

引き 大船の ゆくらゆくらに 面影に もとな見えつつ かく恋ひば 老い
付く吾が身 けだし堪へむかも (19・四二二〇)

今更に 君が手枕 まき寝めや 吾が紐の緒の 解けつつもとな (12・二六一
一)

さ夜中に 友呼ぶ千鳥 物思ふと わび居る時に 鳴きつつもとな (4・六一
八)

心なき 秋の月夜の 物思ふと 眠の寝らえぬに 照りつつもとな (10・二二
二六)

旅にして 物思ふ時に ほととぎす もとなな鳴きそ 吾が恋増さる (15・三
七八一)

一つ目の四二二〇番歌は娘坂上大嬢と離ればなれになっている母親坂上郎女の歌である。その我が子の姿が面影にやたらと見え続けると歌われ、こんなにもどうしようもなく思っていたら、年老いた我が身はとも持たないだろう、と歌われる。また、二六一一番歌は恋愛関係が絶縁した女性の歌である。共寝の可能性が無いのにもかかわらず無意味にほどける自分の下着の紐は、希望の無いこの女性をひどく苛んでいる。また、六一八番歌の中の叙述の主体は、「物思ふと わび居る」とあるように、恋の相手との仲に失意・失望し、独り寝の状態にある。それなのに千鳥は、恋の相手を求めて自由に鳴いているのである。独り寝の自分にとって、その鳴き声は、失意や失望の心を逆撫するように響いている。その鳴き声に苛まれているのである。以下は、紙数の都合で省略に従う。

当該作品は、その「もとな」が用いられて「もとなかかりて 安眠し寝さぬ」と表現されている。結果、どうしようもなく「まなかひ」に掛かる「子ども達の像・姿」が私を安らかに寝させないこと、「子ども達の像・姿」に苛まれて眠れないことが表わされている。

(2) 「寢食」の「寢」

井村哲夫氏は、

「モシ能ク永ク、一切ノ諸ノ煩惱ヲ断ジ、染三界ヲ貪ラザル有ラバ、乃チ

安穩ニ眠ルコトヲ得ム」(涅槃経梵行品)。

という用例を示し、煩惱があるゆえに寝られないことを説く仏典の記述を紹介している。⁽⁵⁵⁾この指摘はとても貴重であるが、もう一度、井村氏指摘の仏典を見てみよう。なお、用例の確認の便宜を図るため、『国訳大蔵経』の書き下し文を併記しておくこととする。井村氏指摘の『大般涅槃経』(巻十九 梵行品八之五)には、

爾時大醫。名曰耆婆。往至王所白言。大王。得安眠不。王即以偈答言

若有能永斷 一切諸煩惱 不貪染三界 乃得安隱眠

爾の時に大醫ありて名を耆婆と曰ふ。王の所に往至して白して言さく、『大王安眠を得るや否や。』王偈を以て答へたまはく、

『若能く永く、一切の諸の煩惱を斷じ、染三界を貪らざる有らば、乃ち安隱に眠ることを得ん。……(『国訳大蔵経 経部 第八卷』)

とある。この用例は、波傍線のように、ある王(阿闍世)の発話ということになる。

一方、本稿の論者は、調査において、世尊自身の言葉としての用例を見出した。それは、『雜阿含經』(巻三十九)の次の用例である。なお、ここでも、用例の確認の便宜を図るため、『国訳一切経』の書き下し文を併記しておくこととする。『雜阿含經』(巻三十九)には、

爾時世尊作是念。惡魔波旬欲作燒亂。即說偈言

愛網故染著 無愛誰持去 一切有餘盡 唯佛得安眠 汝惡魔波旬 於此

何所說

時魔波旬作是念。沙門瞿曇已知我心。慚愧憂感即沒不現

爾の時世尊、是の念を作したまはく『惡魔波旬燒亂を作さんと欲するならん』と。

即ち偈を説いて言はく、

『愛網の故に染著す愛無くんば誰れか持ち去らん 一切の有餘盡きたれば唯だ佛のみ安眠することを得 汝惡魔波旬此に於て何をか説く所なる』

と。時に魔波旬是の念を作さく『沙門瞿曇は已に我が心を知れり』と。慚愧し憂感し即ち没して現ぜざりき。(『国訳一切経印度撰述部 阿含部 三三』⁽⁵⁸⁾)

とある。この用例は、二重傍線部のように世尊自身が説いた偈の用例である。この用例によれば、世尊自身が、煩惱と安眠できないことを結びつけていることを知

り得る。

当該作品では、「子ども達の像・姿」に苛まれて眠れない、と述べられるわけであるが、右に見た例に鑑みて、これは、子ども達への愛執の「煩惱」に拠るのだと理解して良いであろう。

五 反歌について

最後に、反歌「銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子に及かめやも」(5・八〇三)の考察に移ろう。この反歌の理解においては、芳賀紀雄氏の指摘⁵⁹に導きを受けることができる。芳賀氏は、「金銀珠玉」と「子」との比較を文学的に可能にする経緯を求める。そして、逸書『三輔決録』を引用する『三国志』魏書、卷十、荀彧伝に対して付けられた宋の裴松子の注の記述を参照する。その『三国志』魏書の記述を見てみたい。⁶⁰

〔三輔決録〕〔注〕曰……康字元將，亦京兆人。孔融與康父端書曰：「前日元將來，淵才亮茂，雅度弘毅，偉世之器也。昨日仲將又來，懿性貞實，文敏篤誠，保家之主也。不意雙珠，近出老蚌，甚珍貴之。」⁶¹

これは、「孔融」が、「康」の父である「端」に送った書状の記述である。その中で、「元將」「仲將」という二人の息子を褒めて傍線部のように「雙珠」としているのである。この故事は、芳賀氏が指摘するように、『芸文類聚』(卷五十三、治政部下、奉使)の中にも、

後漢孔融與韋林甫書曰……前日元將來，雅度弘毅，偉之器也。昨仲將復來，文敏篤誠，保家之主也。不意雙珠，近出老蚌，甚珍貴之。遣書通心。

というように存在する。つまり、奈良朝の貴族には周知の故事だったと言えよう。

また、芳賀氏は、次の『北齊書』(卷三十五)の陸印の伝の記述、

陸印，字雲駒。少機悟，美風神，好學不倦，博覽羣書，五經多通大義。善屬文，甚為河間邢昺所賞。昺又與印父子彰交遊，嘗謂子彰曰：「吾以卿老蚌遂出明珠，意欲為羣拜紀可乎？」

および、次の『庾子山集』(卷四)の記述、

有喜致醉

忽見庭生玉，欣看蚌出珠。蘭芬猶載寢，蓬箭始懸弧。既喜枚都尉，能歡陸大夫。頻朝中散客，連日步兵厨。雜曲隨琴用，殘花聽酒須。脆梨裁數實，甘查惟一株。兀然已復醉，搖頭歌鳳雛。

を指摘する。さらに、『庾子山集注』⁶⁴にある、詩題「喜び有りて酔を致す」に対する清の倪璠の注の「此子山生玉之辞也」という記述をも指摘するのである。

このように、芳賀論文のこの部分の論述には隙が無い。ここは、芳賀氏が、

一首は、「子のとうとさ」「子宝」と評されるごとき、子を珍貴とする心情を、

紛れようもなく、含みとしてみっている。同時になお、いつくしむべき子を有する、純粋な喜びの表白が、前面に押し出されると看取できるだろう。

と述べている見解に従っておくべきであろう。

六 まとめ

本稿は、井村哲夫氏・芳賀紀雄氏の御論に導かれて来たが、本稿としては、序文の「愛」を詳しく論じることによって、この作品の構成について従来の研究では指摘されて来なかった点を指摘できたように思う。その点で、一歩いや半歩だけでも、研究を前に押し出すことが出来たのではないかと思う。

本稿は、初めに述べたように、「題詞・序文・長歌・反歌」という形を採るこの作品の読解を目指して来た。

題詞はまず、この作品の冒頭として、「子ども達をへ思」という問題系を提示する。次の序文では、「子ども達への愛」の内実が示される。本稿は、それを深く追究したのである。「仏説」および「仏典」における「子どもへの愛」は、「煩惱」の義の例があるが、「いとおしく思う」義の例もある。双方が有るわけである。また、日本の散文における「子どもへの愛」は、「愛」に訓として付け得る「うつくし」「うつくしび」「かなし」「めぐし」「めぐむ」「めぐ」などをふまえての、「いとおしく思う」義が大半である。「仏説」「仏典」をへ引用する「日本の散文」としての序文の「子ども達への愛」は、「煩惱」の義、「いとおしく思う」義、のどちらか一

方に決めることは、そもそも、不可能である。「又説 愛無_レ過_レ子」の（引用）によって、両義の混然が作品上にもたらされているのであり、両義の混然の相において捉えておくべきであろう。そして、序文に続く長歌・反歌では、この両義の混然の、いわば「腑分け」がなされている。つまり、

長歌Ⅱ序文の「愛」のうちの、煩惱・苦悩の「愛」を分担。

反歌Ⅱ序文の「愛」のうちの、いとおしく思う「愛」を分担。

という分担がなされているのである。

総じて、当該作品は、序文の「世間蒼生」が抱く「子ども達への愛」の（実相）を表わし出していると思えられよう。その（実相）とは、

子どもをこの上なく可愛いと思う。いとおしいと思う。しかし、苦悩の根源となることもある。そのような時、縁を切り切りたいと思っても、切ることはできない。親は親でなくなることができない。そうしたことをすべて引き受けたうえで、子どもが存在してくれることをありがたいと思う。

という、「子ども達への愛」の複雑な（実相）である。

〔題詞・序文・長歌・反歌〕という形を採る当該作品は、その構成により、右の内容を表わし出した作品となり得ている。このようにまとめて、本稿を閉じたい。

注

- (1) 当該作品の現存諸本において閲覧可能の諸本はその複製を閲覧し、閲覧不可能の諸本は『校本萬葉集』に拠り、本文校訂を私なりに施した。当該作品の訓読および本稿における『万葉集』の引用は、原則として新編日本古典文学全集版『万葉集』（小学館）に拠り、私に改めた箇所もある。
- (2) 井村哲夫氏「思子等歌の論」（『憶良と虫麻呂』一九七三年四月、桜楓社。初出、「憶良『思子等歌』序文の典拠」一九六一年一〇月・「憶良『思子等歌』の論」一九六三年七月）
- (3) 芳賀紀雄氏「山上憶良―子らを思ふ二つの歌―」（『萬葉集における中國文學の受容』二〇〇三年一〇月、塙書房。初出、一九七五年四月）
- (4) 乾善彦氏「子等を思ふ歌―『セミナー』万葉の歌人と作品 第五卷 大伴旅人・山上憶良（二）―」（二〇〇〇年九月、和泉書院）
- (5) 一九九九年五月、岩波書店
- (6) 引用は、『藝文類聚』（上海古籍出版社）に拠る。以下、同じ。

(7) 本稿は、本稿末尾の付記にも記したとおり、第六十一回萬葉学会全国大会研究発表会における口頭発表を基にしている。その質疑応答の折り、芳賀紀雄氏は、故小島憲之氏の「語の性質を考えなくてはならない」というお教えを紹介され、新日本古典文学大系版『萬葉集一』が「思友詩」を挙げるがこれは「交友」という性質であり、同一に論じることができないこと、また、「思子詩」は子どもが死んだ時の詩であり、性質を異にするのであり、同一に論じることができないこと、これらを御教示下さった。本稿を成すにあたり、論述に採り入れさせていただいた次第である。

(8) 精撰本は「曰」が「云」となっている。

(9) 一九五九年九月、岩波書店

(10) 注(2)論文

(11) 注(2)論文

(12) 「愛無_レ過_レ子」のこと。

(13) 傍線は廣川付す。以下同じ。本稿で後に出て来る二重傍線・波傍線も廣川付す。

(14) 注(3)論文

(15) 本稿は、「同一作者が他の作品で行なっている方法だから、この作品もそうだ」と無前提に主張するいわば「もたれ合い」とも言うべき論理は通らないということに自覚的である。参照しておくべきは、神野志隆光氏の発言部分（内田賢徳氏・神野志隆光氏・坂本信幸氏・毛利正守氏「座談会 萬葉学の現況と課題」『セミナー』万葉の歌人と作品』完結を記念して）（『萬葉語文研究 第2集』二〇〇六年三月、和泉書院）の、

たとえば誰でもいい、「作者」という標識で歌を集めてきて、集めてきた上で、それで何か論議する、「歌人」として、編年で整理してみても考えたり、あるいは、方法を考えたりする、というふうなやりかたでいいのかもしれないこととす。

という発言である。この発言は、同一作者名の標識があるからといって、その人物の他の作品の方法を無批判的に持ち込む、そうした研究への痛烈な批判となっている。本稿としても、こうした発言がなされている学界の現在の水準に鑑みなくてはならないことは重々承知している。

(16) 小島憲之氏「山上憶良の述作」（『上代日本文学と中国文学 中―出典論を中心とする比較文学的考察―』一九六四年三月、塙書房）

(17) 芳賀紀雄氏「理と情―憶良の相剋―」（『萬葉集における中國文學の受容』二〇〇三年一〇月、塙書房。初出、一九七三年四月）

(18) 鉄野昌弘氏「日本挽歌」（『セミナー』万葉の歌人と作品 第五卷 大伴旅人・山上憶良（二）―」（二〇〇〇年九月、和泉書院）

(19) 井村哲夫氏「令反或情歌と哀世間難住歌」（『憶良と虫麻呂』一九七三年四月、桜楓社。初出、「憶良『令反或情歌』と『哀世間難住歌』」一九六八年（二月）

(20) 注(17)論文芳賀紀雄氏

- (21) 廣川晶輝「山上憶良『令反或情歌』について」(『美夫君志』七五、二〇〇七年一月)
- (22) 注(17)論文
- (23) 以下の諸仏典の引用は、大藏經テキストデータベース研究会(東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター)の「大正新脩大藏經テキストデータベース」(<http://21dzk.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)に拠る。
- (24) 本稿は、本稿末尾の付記にも記したとおり、第六十一回萬葉学会全国大会研究発表会における口頭発表を基にしている。その質疑応答の折り、「それぞれの仏典の本邦への将来についてはいかようか。」という主旨の御質問を廣岡義隆氏よりいただいた。本稿は、仏説および仏典における「愛」のあり方の一般を知ろうと努めたものであり、もとより、本邦への将来を条件とする「出典論」を展開しようとしたものではない。しかし、その御質問にお応えし、それぞれの仏典の本邦への将来についても確認しておくこととする。この『佛本行集経』は、石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」(『写経より奈良朝仏教の研究』一九三〇年五月、東洋文庫)を参照したうえで、『大日本古文书 卷之七(追加一)』(一九〇七年一月、東京帝国大学文学部史料編纂掛)を閲覧すれば、天平九年三月十二日の「高屋赤麻呂写経請本注文」の中に「佛本行集経第一巻」とあることを確かめ得る。また、奈良国立博物館編「奈良朝写経」(一九八三年四月、東京美術)には、天平十二年五月一日以前書写の『佛本行集経』卷第三十三(東京 根津美術館蔵)の影印を見ることが出来る。
- (25) 一九一九年七月、国民文庫刊行会。引用は一九二八年四月の再版に拠る。
- (26) 一九一八年一〇月、国民文庫刊行会。引用は一九二七年七月の三版に拠る。
- (27) 注(25)に同じ。
- (28) 「方廣大莊嚴經解題」(『国訳一切経印度撰述部 本縁部 九』一九三〇年一月、大東出版社)および『仏書解説大辞典 第九卷』(一九三五年四月、大東出版社)。本稿が「出典論」を指したものでないことは、注(24)に記したとおりである。ここは、父母が子どもをいとおしく思い愛する心が世尊釈迦自らの言葉によって讃えられているか、極めて重要な例であるので、山上憶良在唐当時すでに存在していた仏書・仏典の「愛」のあり方一般であることを確かめておくために記しておいた次第である。なお、山上憶良の在唐期間は、大宝二年(七〇二)から慶雲元年(七〇四)もしくは慶雲四年(七〇七)までである。中西進氏「渡唐」(『山上憶良』一九七三年六月、河出書房新社)。初出、「憶良の渡唐」一九六九年一月)を参照のこと。廣川晶輝「山上憶良作漢文中の『再見』小考」(『甲南大学紀要 文学編 日本語日本文学特集』一四八、二〇〇七年三月)も参照願いたい。
- (29) この注を設ける主旨については、注(24)を参照のこと。石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」(前掲)を参照したうえで、『大日本古文书 卷之四』(一九〇三年三月、東京帝国大学文学部史料編纂掛)を閲覧すれば、天平宝字五年三月二十二日の「奉写一切経所解」の中に「方廣大莊嚴經十二卷」とあることを確かめ得る。
- (30) 一九三〇年一月、大東出版社。引用は一九八四年二月の改訂二刷に拠る。
- (31) 中村元氏「『愛』の理想と現実」(『仏教思想』愛一九七五年六月、平楽寺書店)
- (32) 藤田宏達氏「初期大乘經典にあらわれた愛」(『仏教思想』愛一九七五年六月、平楽寺書店)
- (33) この注を設ける主旨については、注(24)を参照のこと。石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」(前掲)を参照したうえで、『大日本古文书 卷之八(追加二)』(一九一二年一月、東京帝国大学文学部史料編纂掛)を閲覧すれば、天平十四年八月二十九日の「道守豊足写経手実案」の中に「僧伽羅利經三卷」とあることを確かめ得る。なお、石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」(前掲)はこの「僧伽羅利經」を「僧伽羅利所集経」と同じと認定している。また、『大日本古文书 卷之十七(追加十一)』(一九二七年一月、東京帝国大学文学部史料編纂掛)を閲覧すれば、神護景雲二年五月二十九日の「奉写一切経司牒」の中に「僧伽羅利所集三卷」とあることを確かめ得る。なお、石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」(前掲)はこの「僧伽羅利所集」と同じと認定している。
- (34) 注(30)に同じ。
- (35) この注を設ける主旨については、注(24)を参照のこと。石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」(前掲)を参照したうえで、『大日本古文书 卷之七(追加一)』(前掲)を閲覧すれば、天平九年二月二十日の「高屋赤麻呂写経請本注文」の中に「増一阿含經一巻」とあることを確かめ得る。なお、この部分は幸いにも写真版も付されており、写真にて確かめ得る。また、田中塊堂氏「古写経綜覧」(一九四二年九月、鶴故郷舎出版部)を参照すれば、天平宝字六年に僧光寛を願主として淳仁天皇と皇后に奉られるために写経された「僧光寛知識経」(村山龍平氏蔵)が挙げられており、その中に「増壹阿含經卷第十」というようにこの經典の名を見出すことができる。さらに、同氏「日本写経綜覧」(一九五三年八月、三明社)、同氏編『日本古写経現存目録』(一九七三年七月、思文閣)を参照すれば、この經典が奈良時代に多く書写されたことを知り得る。また、『奈良朝写経』(前掲)には、天平宝字三年書写の『増壹阿含經』卷第二十九(京都 智積院蔵)の影印、天平宝字三年書写の『増壹阿含經』卷第五十(奈良 薬師寺蔵)の影印、その他の影印を見ることが出来る。
- (36) 一九二九年一月、大東出版社。引用は一九八六年七月の改訂六刷に拠る。
- (37) 一九二九年一〇月、大東出版社。引用は一九八六年七月の改訂六刷に拠る。
- (38) 松下貞三氏「漢語『愛』とその複合語・思想から見た国語史」(一九八二年九月、あぼろん社)。なお、この松下氏は、第六十一回萬葉学会全国大会研究発表会における口頭発表の直後、峰矢真郷氏に御教示いただいた。
- (39) 引用は、新編日本古典文学全集版『日本書紀』(小学館)に拠るが、訓読については、

- 蜂矢真郷氏より御教示いただいたように、日本古典文学大系版『日本書紀』（岩波書店）の訓読も併せて記す。
- (40) 引用は、新編日本古典文学全集版『古事記』（小学館）に拠る。
- (41) 引用は、日本古典文学大系版『日本霊異記』（岩波書店）に拠るが、訓読については、蜂矢真郷氏より御教示いただいたように、新潮日本古典集成版『日本霊異記』の訓読も併せて記す。
- (42) 引用は、新日本古典文学大系版『続日本紀』（岩波書店）に拠る。
- (43) 以下、訓読の併記において、大系と略す。
- (44) 以下、訓読の併記において、集成と略す。
- (45) 注(38)著書
- (46) 引用は、『高山寺古辞書資料第二』（東京大学出版会）に拠り、影印を翻字した。
- (47) 森本治吉氏『萬葉精粹の鑑賞 上巻』（一九四二年五月、大日本雄弁会講談社。引用は一九四二年一月の二版に拠る）
- (48) 諸注釈書のうち、『萬葉集略解』、『萬葉集新考』、『萬葉集全釈』、佐佐木信綱氏『評釈萬葉集』、『萬葉集注釈』、『日本古典文学全集版』、『萬葉集』、『新編日本古典集成版』、『萬葉集』、『萬葉集全注』、『新編日本古典文学全集版』、『萬葉集』、『萬葉集注』、『萬葉集全歌講義』が因縁・宿縁説で理解し、森本治吉氏『萬葉集総釈』、窪田空穂氏『萬葉集評釈』、新日本文学大系版『萬葉集』が面影説で理解している。
- (49) 内田賢徳氏「『見る・見ゆ』と『思ふ・思ほゆ』——『萬葉集』におけるその相関——」（『萬葉』一一五、一九八三年一〇月）。内田賢徳氏「動詞シノフの用法と訓詁」（『上代日本語表現と訓詁』二〇〇五年九月、塙書房。初出、「上代語シノフの意味と用法」一九九〇年二月）
- (50) 「動詞シノフの用法と訓詁」（前掲）
- (51) 注(50)に同じ。
- (52) 伊藤益氏「非在の構図——『萬葉集』卷十九、四二九二の論——」（『淑徳大学研究紀要』二八、一九九四年三月）
- (53) 「『見る・見ゆ』と『思ふ・思ほゆ』——『萬葉集』におけるその相関——」（前掲）
- (54) 山田孝雄氏「『母等奈』考」（『萬葉集考叢』一九五五年五月、宝文館。初出、一九二七年一〇月）
- (55) 『萬葉集全注 卷第五』（一九八四年六月、有斐閣）
- (56) 一九一八年六月、国民文庫刊行会。引用は一九二七年九月の三版に拠る。
- (57) この注を設ける主旨については、注(24)を参照のこと。石田茂作氏「奈良朝現在一切経疏目録」（前掲）を参照したうえで、『大日本古文书 卷之七（追加一）』（前掲）を閲覧すれば、天平三年八月十日の「写経目録」の中に「雑阿含経五帙五十卷」とあることを確かめ得る。
- (58) 一九三五年八月、大東出版社。引用は一九八七年四月の改訂六刷に拠る。
- (59) 注(9)論文
- (60) 引用は、『三國志』魏書（中華書局）に拠る。
- (61) 左側の傍線、および、左側の波傍線、引用テキストの原文のとおり。以下、同じ。
- (62) 引用は、『北齊書』（中華書局）に拠る。
- (63) 引用は、中国古典文学基本叢書版『庾子山集注』（中華書局）に拠る。
- (64) 注(63)書
- 〔付記1〕 本稿は、第六十一回萬葉学会全国大会研究発表会（二〇〇八年一〇月一九日、於皇學館大学）における口頭発表を基にしている。その質疑応答の折り、また直後に、諸先生方から貴重な御教示を賜りました。お導きを賜りましたことに深く御礼申し上げます。
- 〔付記2〕 本稿の成稿（二〇〇九年一月三二日）の後、大浦誠士氏「山上憶良『思子等歌』の構造と主題」（『萬葉集研究 第三十二集』二〇一二年一〇月、塙書房）に触れた。当該作品を「全体が一つの統一的なテーマによって括られる作品ではな」とする大浦氏論の論述と本稿とは一部重なる点もあるが、本稿の調査および論述に独自性があるので本稿をそのままとし、この付記にて大浦氏論を紹介させていただくに留めた。